みによって構成された社会への絶望的な不信感とそれに伴うコンプレックスは、今なお私の内部にふつふつとくすぶってはいるが)。

とにかく、自己の内側と外界とのつながりについて幼い時感じた一つの不安感は未だ解消せず、時には、絵をかく源の問題として、たえず私をおびやかし続けている。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、等々あらゆる神経組織は、私に外界におこる様々な現象を伝えてくる。

中でも、視覚を主として私にものを感じさせ考えさせる、「見る」という事は、私が今、生き、存在する事の証(あか)しとして私にとって非常にたよれる事である。

私は、音楽も好きであるが、それは私にとってやはり映像的なリズムとして感じられてくるし、他の文学その他についてもやはり一つの映像に翻訳されて私の理解にかなう。

そのような点で、私は、本当にプリミティブな者、現代人らしからぬ人間かもしれない。

「色彩、日本画絵具」について

さて、「見る」という人間共通の肉体的メカニズムについて、果して、私以外の人間と私との共通点はどうだろう、どの程度差異があるのか、それともかなり正確に同じようにものを感じ見る事が出来ているのかどうか、そうした不安感は、私が、色彩についての記憶の非常に不正確な事を自己の中に見いだして、自分の色彩を感じる能力の不思議な変化にある種の期待とあきらめを感じ持つ。

その一方、現在、私が使用している絵具自体が非常に美しい日本画絵具に新鮮な可能性を絶えず持ち続ける事が出来る。

私は、色彩自体について考えてみると、先に感じた通り、私にとって、一つの視覚現象として非常に不安定なものである。例えば私の、左右両眼でも、右眼、左眼とわずかながら差異が感じられる。右は少々青っぽく、左は少々黄っぽい。

それだから画面に於ける色彩は、私の日本画に於て、かなり象徴的でなければならないし又、象徴的であり得る。私の好きなある種の朱色は、美しいと感じさせる象徴性がそれ自体に在るように思われ、一つの祈りの通じるものになり得るように感じられる。

真円をかき、朱でぬる、これは太陽である。真円をかき、その周囲を朱でぬりつぶす、これは、太陽を囲む宇宙的空間であり、白く残された円は、日輪であり、更にそれらをこえた天体その他を象徴的に感じさせる。

それと同じ意味で、紅梅も、朱唇も、前者と同じ私の好む朱で美しく目的を達し、一種の祈りを通じさせる。私の日本画に於ては、赤の持つ様々な色彩心理を、一つの朱色で象徴させ、他の色彩についても同様である。従って私は、日本画に於て、絵具は、混濁させて用いるべきでないとおもう。出来得る限り、純化し、単一のものとして画面に定着すべきである。私の場合、前にあげた、私の感じる色彩の様々な不安感を安定させる為にもこれは私にとって第一に必要な事であり、色を

着ける喜びも更に深くなるように思われる。

群青、緑青、朱、黄土、胡粉、墨、等々、日本画顔料には私を支えてくれる象徴的なレアリテを、その絵具の個性的概念としても、はっきりと、「色」と、その「心」としてかなり安定した美への感じ方を私に与えてくれる。

ともあれ「祈り」の通じる顔料を使用出来る日本画は私にとって全くの救いである。祈りながら着彩出来れば、私のおもう世界に一歩でも近寄れるのであるから。

結果的に於て、現在の私の絵は、いわゆる装飾画の範疇に入り、それから出る事は出来ないのであろうか。しかし、私の考える日本画の可能性はそれ自体（装飾絵画）の奥深く這入り込みそれ自体が、絵画造型の私にとっては未知の空間を探りあて、表出し得る唯一の手だてであると今は信じているのであるが。

「金」「銀」について

私は、「金」「銀」についても様々な私なりの日本画的な考え方、見方を持とうとしている。「金」「銀」には、私の絵画に於て一つの極めて便利な空間表現を行う手だての顔料として多くの事を私に教えてくれ、日本画一般についてもこの概念はあてはまると思うが。

私の場合、「金」「銀」は、「時間を伴った空間」ないしは、時間を超越した空間、つまり、過去、未来、それをとりかこむ横側等々、ある種の次元空間、その中に存在する物象を表現するのに都合

のよい顔料である。過去の人達は宗教絵画にこの象徴的特性を巧みに利用し、「金色」の象徴的意義を強調してきた。

（私は、いつも、人間が「金色」「銀色」をそれ自体の色として発見したのは、きっとかなり近い過去に違いないと感じたりする。人間にとってそれらは、第三の色彩と呼ばれてよいものかもしれない。）

これからの私の絵画に於て、金箔、銀箔、そして金泥、銀泥の造り出す世界は限りない可能性を私に与えてくれそうな気がする。

勿論、「金」自体、貴金属としての不変不易の特性による安定性もあろうが、それを越えた色彩として、前のような意味が、現在の私にはある。

それにつけても、日本画的水墨画の名手であった宗達の、「金銀泥和歌巻」等々に於ける単なる装飾画を越えようとする作例を想うとき私の日本画に忘れてはならない一つの可能性を感じる。

ともあれ、私は、私の中の第三の「色彩」としての「金」「銀」について、更に明確な一つの概念とか観念を持たねばならないし、そして日本画のみが可能であると思われる異次元の綜合的な絵画空間を造り出したいものと思う。

「水墨」について

色彩について様々な、想い、祈り、を感じ行きつく安定した果てに在る色彩、色彩を超えた「色」

金と銀

初めて日本画絵具を手にしたときのとまどいは、今でも新鮮なある種の感慨で思い出される。ことに、赤口の深い味をもった朱、濁りのない松葉緑青、濃口の群青などは、絵具それ自体がそれぞれ非常に強い固有の情感を持っているようで、絵画用としては美し過ぎると思った。それらの絵具は、ずいぶん長い間ただ眺めるだけで、なかなか画面に使用できなかった。これらの色は、決して出すぎはしないのだが、かなり波長の高いはっきりした音色を奏で続けるのである。何らかのかたちで少しずつその美を殺し、本来的な意味での絵画用絵具にしてしまわなければ使えず、といってそれが、これら美しい日本画絵具の生きた使用法であるとは決して思わなかった。

だから、朱、緑青、群青を見るたびに、私はなんともいえない恐怖感のようなものを抱いた。たとえば赤口の朱（私の現在もっとも好きな色の一つであるが）には、はっきりした一つの魂のような情感があって、私をある場所へいざなうのである。いってみれば、非常に美しい女性が、ふとみせる非常に美しい醜さ、つまりすさまじい美の岐点のようなものを強く感じさせる情感を持っている。だからこの朱色にはさからわないように、惜しんで、紅梅の赤も日輪の赤も、炎の色も口唇の

紅も、みな同一の朱色で彩る。他の緑青、群青、そして墨も同じく別個のはっきりした性情をもっている。この点、他の顔料、水彩絵具、油絵具、ポスターカラーとは、まったく次元が違ってみえる。彼らはパレット上で混ぜられることを待っているし、画面でハーモニーをつくられることを待っていて、ほとんど画家の言いなりになるように見えるのだ。純正の日本画絵具は決して私の自由になりはしない。混色して濁らせては駄目なのだ。

さて、金と銀だが、現在の私にとって、これほど不思議な想いをさせる絵具用材はない。

正直言って、以前は、自分の絵画の中に金、銀を使用するなどとはとても考えられなかった。金、銀は当然のように絵画の中に入れなかったし、本当にバカなことだが、金、銀など使用するから日本画は前近代的、非現代的であると信じこんできた。理屈でなく感覚的に金泥、銀泥、それらの箔は、自分の絵の世界に無縁なものとのみ思いこんできた。それとうらはらに、父の生業であった帯の図案に使用される金銀の美しさには、幼い時から親しんできたし、父の仕事場で仕上げに使う金銀の絵具に自分なりの妙な意味をもっていた。実際、はじめて光琳の「燕子花図屏風」の前に、そして「紅白梅屏風」の前に立ったときの、背筋に感じた恐怖に似た喜びは、ごく幼いときに素直に感じた金銀の美に直結している。それらは私に、金色の、静かで重く強い空間を感じさせた。

本当に、私の金銀に対する観念の変化は激しい。だが、こうして現在、金を自分なりに自由に使用できるようになってから、私の日本画に対する考え方もずいぶんかわってきた。以前、あのように忌避してきた本来的な意味での日本画絵具にも、どうにか情感を持ち得るようになった気がする

し、日本画における絵画空間をも自由に考えられるようになったと感じられる。金銀泥箔が、私の日本画をさらに本来的な私の絵画にさせてくれそうに思えてならない。

金と銀。性質、情感ともに非常に異なった面が多いが、共通に在るものを考えてみたい。金、銀ともに重く静かな空間を形成し得るが、その静かさは、あえて言うなら負の音色を持っているようにみえる。だから、私の感じている波長の高い音色をあげ続けるどの個性の強い色彩の絵具を持ってきても、実に静かな空間を造り得るのである。その金銀色のもつ重さは、経過していく時間をさえ吸収してしまうのだ。だから、真に絵画的な空間、たとえば一瞬の永遠といったようなものを、金銀が造る空間の中に見つけやすい。超現実的なものでなく、もっとも象徴的なものである。

私は、やさしい静けさを求めて金、銀を使用する。もしもさわがしさを出しはじめ、深い重さを失ったら、私にとって金銀の意味はない。

仏画、金碧障壁画、日本絵画の優れた作例の中の「金」に、私は美しい空間を見る。仏画の中の一条の金色の截金が、紺地金泥の仏典が、また金碧障屏の中の広大な金箔地が、そして宗達の「金銀泥和歌巻」などが、私に、金の持つ素晴しい特性や可能性を示唆してくれる。

陽にすかして見ると、うす青いセロファンのように透きとおる一枚の金箔が造り出し得る絵画空間の恐ろしさは、はじめに述べた日本画絵具に対する不思議な恐怖感に似ている。截金をきる竹刀のひそかな音や、絵具皿にときうすめるとき指先に感じる金泥の感触の中に、はじめてそれらを手にしたときのとまどいを、私はいつも新鮮に思い出す。